

---

# 不慮の再会

Jan Ford

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不慮の再会

### 【Nコード】

N0664D

### 【作者名】

Jan Ford

### 【あらすじ】

夜道の中人知れず再開する二人の男。一人は追いかけ、一人は逃げる。それは、あまりにも空しい出会いだった。

「誰か！」

息が切れる。走りっぱなしで、鼻のまわりをさすような痛みが覆っている。もうだめだ。これ以上は走れない。

せまい通りの中で、後ろから一組の足音が執拗に宗谷そいを追いかけってくる。辺りは真っ暗で、足元さえもよく見えない。

「誰か……」

声がかすれた。どうして誰も俺を助けてくれないんだ。ここにも、そこにも、家は通り一面に立ち並んでいるというのに！部屋から出てきてくれさえすればいいんだ！

つま先が何かに当たったのに気づいた次の瞬間、宗谷は転んで、コンクリートの上に体を打ちつけていた。両手のひじと掌がすりむいた。

直後、宗谷の首筋を冷たい手がガツとつかみ、そのまま顔を地面に叩きつける。意識がとんだ。上下が分からなくなる。

「宗谷……久しぶりだな……」

ひどく息が上がっていて、声をだすのも苦しかったが、古泉こいずみは構わずに宗谷の体の上へのしかかった。

「古泉部長……」

「自分が何をしたか、覚えてるんだろうな……」

首を押さえつけている腕に、さらに力を込める。宗谷の口から呻き声が漏れた。古泉は口をほころばせて軽く笑みを浮かべ、復讐の甘美な感慨を存分に味わった。

「結構痛かったんだぜ。なんせ電柱にぶつけられたんだからな。なあ、お前は どうして上司を見捨てて逃げ帰ったりしたんだ？おい、答えてみるよ！見てみるこの傷を！頭にひびが入ったじゃねえか！」

古泉はそう言って、震える宗谷の目の前に、髪を掻き分けた自分の側頭部をグイッと近づけて見せた。髪の間から生々しい針の縫い

あとがのぞいていて、そのまわりだけ髪の毛が削がれている。

「何？」

「すみません。本当にすみません。こんな……こんなことをするつもりはなかったんです。本当にすみません。許してください……」

宗谷の瞳から、大粒の涙がポロポロと流れ落ちる。とめどなくこぼれ出てくる鼻水が、あごを伝って地面に垂れた。古泉は無表情のまま宗谷のことを見下ろし、何もしないでじっと黙っていた。ひと気のない路地の真ん中で、二人の男がコンクリート舗装の上じじっとかたまっている。

やがて泣き声は消え、辺りに再び静寂が訪れた。

宗谷はそれでもまだ絶え絶えと、小さな嗚咽を漏らしていたが、それはもうほとんど聞き取れないほどの大きさだった。

「なあ、宗谷」

不意に、古泉はつぶやいた。声はどこか遠くの場所を向いていて、宗谷ではない他の誰かに向かって言われたかのように聞こえた。

「はい」

なき続けて力の抜けた喉から、宗谷は何とか力を振り絞って応えた。

「由香は、俺の葬式の時に泣いていたか？」

気持ちの読み取れない、淡々とした口調だった。大島由香は古泉部長の恋人だった人だ。30代にしてはじめて同棲したという相手で、古泉は職場にいてもことあるごとに彼女の話をしていた。

本当は知らないのに、「泣いていました」と答えた。そう言うしかなかった。

「そうか……」

古泉は何も言わない。ただぼんやりと、電灯の光を眺めている。

古泉部長、本当にあの日は、こんなことをしてしまうとは思ってなかったんです。いつものように会社を出て、いつものように居酒屋に向かって……。

あの日は部長と僕以外は都合がつかなくて、他の皆はついてこなかったんです。二人で寂しく、それでいても互いにどこか気があって、話もまあまあ盛り上がりましたね。何を話していたんですっけ？僕はもう忘れてしまいました。だって、何を争って喧嘩したのかも覚えていないんですよ？

あの日は珍しく雪が降ってましたね。ちょうどドラマの中でも降ってきそうな、真っ白な雪ですよ。その上に。部長は倒れて、頭から流れた血が、白く積もった雪にじわりじわりと広がっていった……あの光景が僕の目に焼きついて、今も離れないんです。どうしたらいいんでしょう？教えてくれませんか？毎日毎日がつらくってしかたないんです。

「おまえ、今どんな生活してるんだよ」

唐突な問いかけに、宗谷はハツと気を取り直した。

「どんな……ですか。毎日、同じことの繰り返しですよ」

「楽しいか？」

「……いいえ」

つらいんです。毎日毎日がつらくてしかたない。

「そうか」

古泉はそういつて立ち上がった。体が一気に楽になる。古泉は名残惜しそうに夜空を見上げ、それから大きなため息をついた。

「もう行ってくれ。この近くにはもう二度と近よるなよ」

顔を上げると、もうそこに古泉の姿はなかった。かわりに夜空の中でうつそうとした雨雲が、月に被さって浮かんでいる。

宗谷は、ゆっくりと立ち上がった。そして、辺りを見回してから、再びいつもの場所へと歩き出した。ひと気のない夜の橋へ。自分の人生が、終わりを告げたところへ。

途中、深夜残業を終えた一人のサラリーマンが彼のすぐ脇を通り過ぎていったが、そのサラリーマンは何事もなかったかのように帰路をゆき、自分の脇を男が通っていったことなど全く気づいていなかった。

毎日々日が、つらくてしかたない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0664d/>

---

不慮の再会

2010年10月8日15時36分発行